

# ⑨11月19日（水）衣食住、特に僧衣の「中國化」

チベットの僧衣



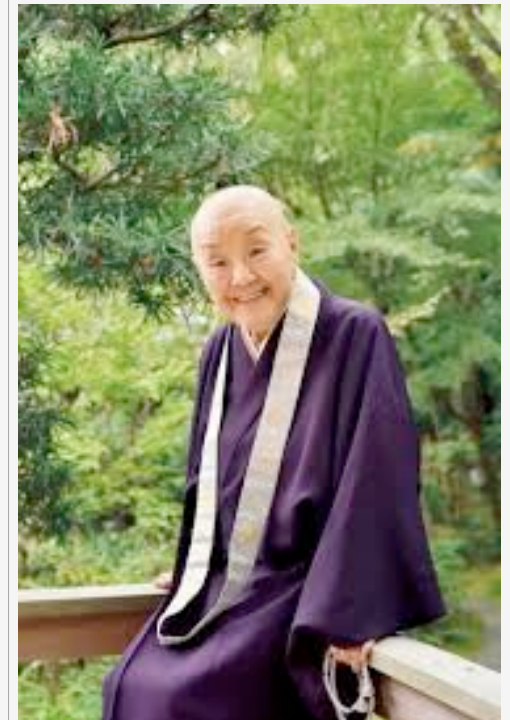
スリランカの僧衣



中國の僧衣



日本の僧衣



## (1) 「緇衣」「黒衣」「白黒」

中國の佛教では、その歴史全體を通じて、出家を黒色で、在家を白色で言い表す習慣がある。僧衣色は「黒」＝「緇」、在家の服は「白」という定型的表現がある。

在家と出家を併記時、漢語で「白黒」や「白衣黒衣」を用いる。

緇 zī = 黒 hēi = 皁 zào = black

漢語「黒衣」「緇衣」に相當し、\*"black robe" を意味するサンスクリット原語は無い

☆「黒衣」「緇衣」は中國特有？

一方、在家を白や白衣と表現する例はサンスクリット語にもある。例えば **avadāta-vasana** がそれである。だがそれと對比して僧衣を \***kṛṣṇa** と描寫する例は、管見の限り、見付けられない。

## (2) 漢譯經典から分かるインドの僧衣の色

後秦鳩摩羅什（約350-409頃）譯『大莊嚴論經』卷一一  
(T4,320c)：

我著赤色衣，映珠似肉色，此鵝謂是肉，即便吞食之。

私は赤色の衣を着る。それは肉色に似た珠玉に映る。ここにいる鵝鳥はそれを肉であると〔誤〕解し、すぐにそれを飲み込んだ。

北涼曇無讖譯『大般涅槃經』卷一六（T12,457b）：

善男子，如提婆達教阿闍世欲害如來。是時，我入王舍大城，次第乞食。阿闍世王即放護財狂醉之象，欲令害我及諸弟子。其象爾時蹋殺無量百千眾生。眾生死已，多有血氣。是象嗅已，狂醉倍常。見我翼從被服赤色，謂呼是血，而復見趣。

良家の息子よ、ちょうどデーヴァダッタ Devadatta が（マガダ國王）アジャータシャトル Ajātaśatru を唆かして如來（＝佛＝我）を殺害しようとしたのと同じである。その時、我は大きな都ラージャクリハに入り、順々に〔各家で〕乞食した。すると、アジャータシャトルは〔王の財物を守る〕象を興奮させて街に放ち、我と我が弟子たちを殺害しようとした。その時、その象は百、千に及ぶ無数の生き物を踏み殺した。生き物たちが死ぬと、街は大量の血液だらけになった。その象は〔血の臭いを〕嗅ぐと、今まで以上に興奮した。そして我々が身に付けている衣が赤色であるのを見て、血の色と叫び〔誤解して〕、それを見て我々に向かってきた。

### (3) 中國の僧衣色：後漢～三國時代

魏収（506-572）『魏書』釋老志（成書554年）：

漢世沙門，皆衣赤布，後乃易以雜色。

後漢代の沙門は皆、赤い布を着たが、その後、混合色に変わった。

牟子「理惑論」 （『弘明集』 卷一;T52,3a）<sup>6</sup>：

今沙門剃頭髮，**披赤布**，見人無跪起之禮儀，無盤旋之容止，何其違貌服之制，乖搢紳之飾也。

現在、沙門は頭を剃髪し、**赤色の布**を着ている。彼らは誰か別の人を見ても、身を屈め起立して〔正しく〕禮拜するということをしないし、立ち居振る舞いの正しい作法をしない。どうして彼らは正しい正装に背き、正式な服飾に違反するのか。

牟子「理惑論」 （『弘明集』 卷一;T52,4c）：

今沙門**被赤布**，日一食，閉六情，自畢於世，若茲何聊之有。

現在の沙門は**赤い布を着て**、一日一食、〔五感と心の〕六情を閉鎖し、世俗から別れて、一體どのような安らぎがあるのか（何もない）。



## （４）中國の僧衣色：南北朝

沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」（『廣弘明集』卷二三; T52, 271a-b）：  
 又於一時，虔請聖眾，七日供養，禮懺始訖，攝心運想，即見兩外國道人舉手共語。一云呌羅，一言毘呌羅。**所著袈裟色，如桑葚之熟。**因即**取泥，以壞衣色如所見。**於是遠近尼僧並相倣效，改服**閒色**，故得絕於五大之過，道俗有分者也。（≈梁 寶唱『比丘尼傳』卷四、淨秀尼傳）

またある時、心を込めて多くの聖なる菩薩たちをお招きし、七日間、供物で接待した。まず禮拜と懺悔をした後、精神瓜一して觀想すると、二人の外國人僧が手を舉げて共に語らうのが見えた。一人は呌羅という名、もう一人は毘呌羅という名であった。**〔二僧の〕身につけている袈裟は、熟した桑の實のような色だったので、〔淨秀は〕泥を手に取り〔自らの〕衣の色を濁して〔みすぼらしくし〕、見たままの色にした。**かくして尼僧たちはきもきもこぞってこれに倣い、着衣を〔純色以外の〕**閒色**に改めた。この結果、五大純色の衣をまとう違反を止め、出家と在家を明確に區分できるようになった。

「所著袈裟色，如桑葚之熟」

「（二僧の）身につけている袈裟は、熟した桑の實のような色だった」





## (5) 中國の僧衣色：唐

道宣（596-667）『釋門章服儀』（T45,837b）：

木蘭一染，此方有之，赤多黒少，若乾陀色。『經』云「見我弟子被服赤色，謂呼是血」。『論』言「我著赤衣，映珠似肉」等是也。今有梵僧西來者皆著此色，即其證也。

木蘭色の染色はここ中國にあり、赤色が強く黒は少なく、乾陀色（褐色 **kardama "mud 泥"**）のような色である。『〔大般涅槃〕經』に、「〔興奮した象は〕我が弟子たちの着る僧衣の赤色を見て、血であると叫んだ」と言い、『〔大莊嚴論〕論』に「私の着る赤色の僧衣は、肉色に似た珠玉に映る」と言う等はこの〔木蘭〕色である。現代の西方から來華するインド僧たちは皆、この色の衣を来ているのがその證據である。

## (6) 中國の僧衣色：北宋

元照（1048-1116）『佛制比丘六物圖』（T45,898b）：

三種染壞，……。一者、青色〈『僧祇』謂銅青色也。今時尼眾青褐，頗得相近〉。二者、黑色〈謂緇泥涅者。今時禪眾深黪/驂竝深蒼褐，皆同黑色〉。三者、木蘭色〈謂西蜀木蘭皮，可染作赤黑色。古晉高僧，多服此衣。今時海（⇒深）黃染絹，微有相涉。北地淺黃，定是非法〉。三種の混合染色法…。第一は青色である〈『摩訶僧祇律 Mahāsāṅghika-Vinaya』は〔青色を、銅の腐食した〕緑青色であると言う。現代の比丘尼たちの着る青褐衣はややそれに似ている〉。第二は黒色である〈黒い泥色を言う。現代の禪僧の着る濃い青黒色衣と濃い青褐色衣は皆、同じく黒色である〉。第三は木蘭色である〈西蜀地方の木蘭の樹皮は染色すると赤黒色である。古晉（＝西晉・東晉）の高僧は多くこの色の衣を着た。現代の濃黄に染めた絹衣は少し木蘭色に似ている。北方の薄黄衣は全く正しくない〉。

# 結論

## 「佛教中國化」

§ 1 「佛教中國化 Sinification of Buddhism」を知るには、中國文化を内部（内側）からだけでなく、外部（外側）との對比し觀察することが必要。これは「佛教東南アジア化」「佛教日本化」「佛教アメリカ化」「佛教歐州化/ヨーロッパ Europe 化」についても同様である。

特に「佛教中國化」を的確に知るためには、インド佛教思想・インド佛教文化と對比して中國佛教を性格付けする視點が不可缺である。

§2 「佛教中國化」は様々な局面に現れる。それは、古典漢語文獻に現れる中國化（抽象的な思想面と文化面の中國化）と見たり聞いたり觸れたりできる知覚可能な中國化（物質面や事物面の中國化）の二種に大別することができる。

眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識という六識の中、後者の知覚可能な中國化は、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識という前五識と關係する中國化である。

一方、前者の古典漢語文獻に現れる中國化は、漢語文獻解釋を必要とする意識という第六識と關係する中國化である。

§ 3 古典漢語文獻に現れる中國化を知るには、漢語佛典の種類、特に漢譯という體裁を有する三種文獻を區別し、それぞれの中國化を把握すべきである。三種文獻とは、漢譯經典（インド語原典を古典漢語に翻譯した經典）・偽經（中國で偽作した經典）及びその兩方の中間に位置する編輯經典（インド語原典の文言を用いて、偽經とは異なる形式で、中國で編輯した經典）という三種である。三種は次のような相違を有する。

|      |                                                 |
|------|-------------------------------------------------|
| 漢譯經典 | Made in India, translated in China              |
| 編輯經典 | Made in India, assembled (or compiled) in China |
| 偽經   | Made in China with Chinese cultural elements    |



§3(1) 三種文獻の第一は「漢譯經典」（漢譯經、漢譯律、漢譯論）である。

漢譯經典を作つ時の原則は直譯である。従って、原典に忠實な逐語譯から逸脱しな限り、漢譯經典に「佛教中國化」が顯著に現れることはない。しかし逐語譯が困難な場合は、「佛教中國化」を示す。最も端的な例は、船山徹が提唱する「文化對應型譯語」である。すなわち、意味を直譯するより簡潔明瞭に理解できる類似語が傳統的中國文化に存在する時、漢譯者は直譯を避け、文化對應型譯語を積極的に活用した。

以下の5例は、中國文化の基盤と直接關聯する次の譯例である。

**bodhi** (菩提) ⇒ 道 (「成道」) …儒家語、道家語

**nāga** (蛇) ⇒ 龍

**amṛta** (不死液) ⇒ 甘露

**deva** (神、神格) ⇒ 天

**nirvāṇa** (涅槃、圓寂) ⇒ 無為 / 本無〔早期漢譯。後に撤廢〕

§3(2) 三種文獻の第二は「編輯經典」である。後述する偽經のように中國特有の文化的要素・素材を使用せず、インド語原典のみを素材として中國で編纂した經典である。この第二類は、中國佛教の形成に大きな足跡を残した。

編輯經典に現れる「佛教中國化」は、次の三種に大別できる。

- (1) インド語原典の長文饒舌を削除し、同内容で簡略本を作る。
- (2) インド語原典の各處に散財した統合した簡潔本を編輯する。
- (3) インド語原典の内容を變えず、全體構成を明確化する編輯をする。
- (4) 漢譯を讀むだけでは理解困難な場合、漢譯者自身の解説を補足する。

補足解説の内容は次の通りである。

(4 A) 原文の解釋方法が複數ある時、その優劣を解説する。

(4 B) インド語原典の度量衡を中國の度量衡に換算する解説を補う。

(4 C) 漢譯は同じでも、インド原語が異なる場合、インド原語を示し、漢人學習者が誤解しないよう（現在、大學の講義で行う解説と同じように）、漢人學習者理解を助ける補足的解説を漢譯の中に含める。

(4 D) インド原典の一語を漢字二字で漢譯する場合、漢字二字は實は同義であっても何故に二文字とするかを納得させるため、本來は分割區別できない漢字二字を一字ずつ區別して解説する。

これは漢語で思考し、言語表現する漢人聴眾への對機說法（方便 = **upāya**）として宗教的教育効果が高い。

§ 3 (3) 偽經は、インド語原典にはあり得ない中國特有の要素を含む偽作經典である。偽經には佛教を混亂させようする惡意より、インドの釋迦牟尼の口で説いて欲しかったのにそれが漢譯經典に見られないような場合に、漢譯經典を補足し、中國文化と整合する佛教（中國文化と矛盾しない佛教）を確立する意圖がある。つまり、「惡意の偽經」でなく、「善意の偽經」も存在した。本講は次の偽經を例示した。

(A) 偽經『提謂波利經』

「五戒」を中國文化の五行説に基づいて解説

(B) 偽經『清淨法行經』

インドの傳法者を中國の儒學・道學と繋げる

(C) 偽經『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王經』

漢譯語が異なれば、サンスクリット原語が同一でも別と解釋する

§4 以上はすべて「古典漢語文獻に現れる中國化（抽象的な思想面と文化面の中國化）」についてであった。

一方、見たり聞いたり觸れたりできる知覚可能な中國化（物質面や事物面の中國化）については、漢人佛教徒の「衣、食、住」生活に現れる。

§5 「衣」の中國化について、それを實態に即して正確に理解することは、現時点では誰もできない。理由は、現存資料が錯綜していることと、必要な資料が現存していないことである。



それ故に結論を斷言できないが、白衣を着る在家者との對比から出家者の僧衣色を「黒」＝「緇」としたことは、恐らく最も顕著な中國化であろう。

§6 「食」の中國化が顯著に現れるのは「五辛」（＝「五葷」＝「五葷辛」）である。

五辛は、[1]大蒜、[2]革葱、[3]慈葱、[4]蘭葱、[5]興渠である。このように五辛を明示し、具体的に示したのは食の佛教中國化である。

更に、この中、五辛を忌避する理由にも中國化が見られる。インド佛教で酒や大蒜（及びその他の強臭の野菜）を避ける理由は單純明快であった。それは、曇無讖譯『大般涅槃經』に明記される通りである。すなわち、大乘佛教徒は自らが菩薩になって眾生濟度をすることを使命とするのに、體臭や口臭が強烈であれば、眾生は說法

者の體の惡臭を嫌って近寄らないから、說法活動をできない。それゆえ、說法の大前提として身体を清淨に保つべきである。これが五辛を忌避する理由である。

しかし後代、中國では唐代後期に偽經『首楞嚴經』（正名『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』）が作成され、そこに全く別の五辛忌避理由が明記されるようになった。すなわち「〔五辛を〕加熱して食べると色慾を發し、〔加熱せず〕生のまま食べると瞋恚（怒り）を増やす」（T19, 141c）という理由である。これは身体清淨性とは無關係である。五辛を攝取すると「精力（性欲）」が増大するから修行を妨げるという理由である。これは中國で生まれた偽の理由である。

五辛の中國的變化はもう一つある。それは「興渠」の新解釋である。元來、「興渠」はサンスクリット語ヒング **hiṅgu** の漢字音寫語（音譯）であるが、現代の漢民族は一樣に「興渠は洋葱 **onion**」であると解釋する。ここに五辛の現代中國化が見られる。

§ 7 衣食住の「住」に関する中國化は特に次の二點に顯著である。

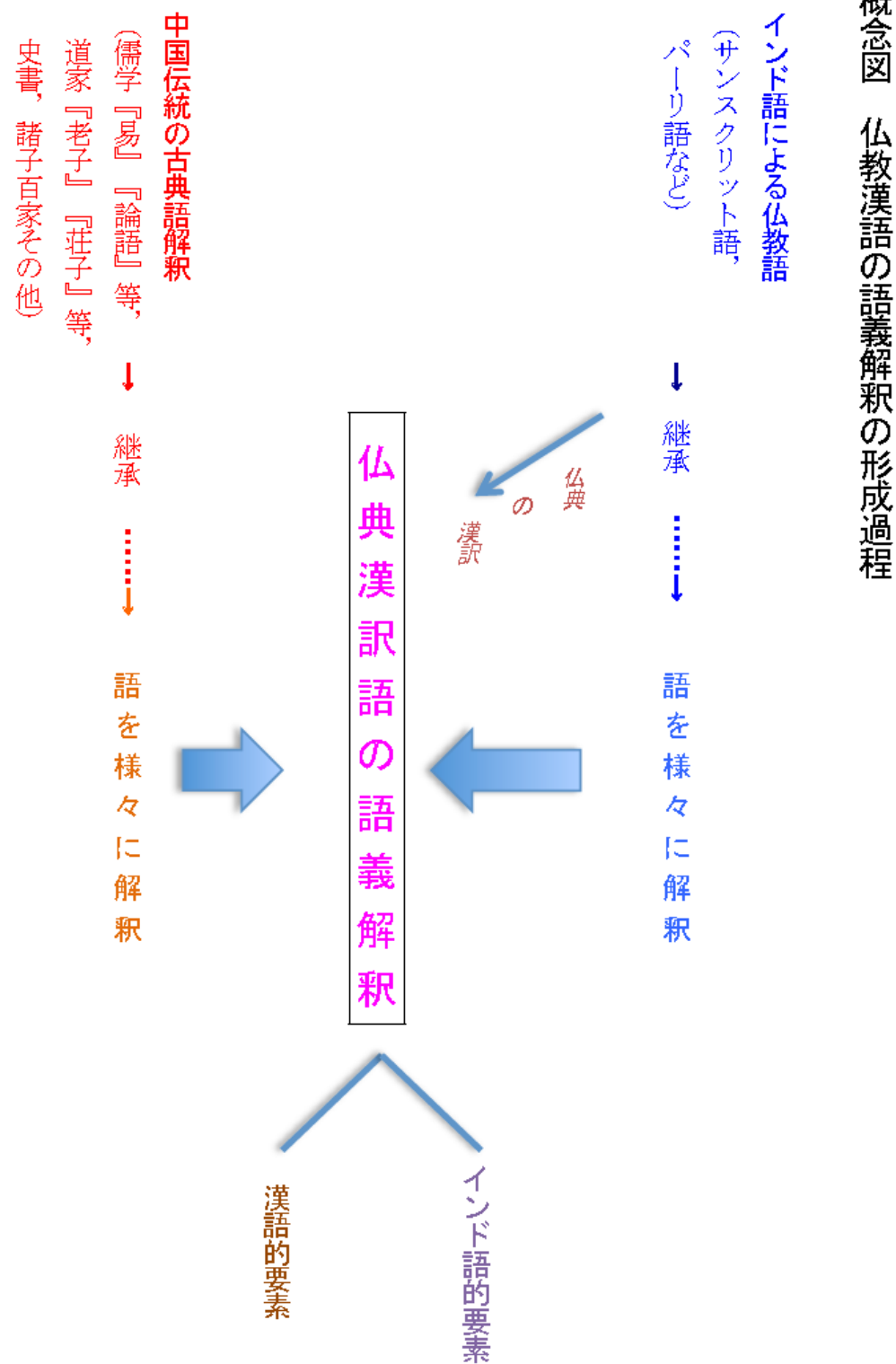
第一は、釋迦牟尼の遺骨を安置するストゥーパ **stūpa** の中國化である。インドにおいてストゥーパは石や土砂で作成し、その中心を占める「覆鉢」という部位の内部に釋迦牟尼の遺骨またはその代用品として寶玉を収めた。「覆鉢」の形状は円錐形に類似した。しかしストゥーパが中國に傳來すると、ストゥーパは佛塔という名前

で呼ばれ、その素材は石製・土砂製から木製に變化した。そして複数の屋根を重ねる五重塔・七重塔という形状に變化した。更に佛塔はインドのストゥーパと比べられない程の高層建築となった。その高い木造建築が倒壊しないようにするために、「心柱」を内部に設置する特殊な建築技術が發達した。

第二の中國化は、椅子の傳來である。椅子に坐る生活は、佛教に不可欠な本質的要素ではないが、インドで廣く普及していた椅子文化は、佛教と同時に、中國に傳來し、中國の生活様式を一變した。佛教傳來以前の中國には椅子に座りながら卓上で執筆したり食事したりする生活は無かったが、椅子の傳來により、特に食事作法に一大變革が生まれた。

## § 9

漢字で思考し、  
言語で表現する  
という観点から  
「佛教漢語  
の  
中國化」  
を図示すると、  
右の通りである



## 最終結論

中國佛教の最大の特徴は、漢字を用いて思考することである  
**中國佛教は佛典を漢譯した瞬間と同時に中國化を開始した**

先行研究      割愛

(必要な人には後日メールで送付します)

ありがとう